2012 年　8 月 19 日・岩手日報「読書〈郷土の本棚〉」欄では

評論超えて人間像に迫る

川村杳平（ようへい）『鬼古里（おにこり）の賦（ふ）』

本書は俳人でもある著者の 1987 年から 2011 年までの評論やエッセーを収め、その批評活動の集大成と言える内容。中心をなすのは「北の俳人列伝」「北の歌人列伝」など本県の俳人、歌人を取り上げた評論。岩手日報社発行の文芸誌「北の文学」や俳誌「草笛」、短歌文芸誌「北宴」に発表したもので、本県俳壇、歌壇に足跡を残した人々の魅力を知ることができる。

「北の俳人列伝」は、県内だけでなく全国的にも評価の高い作家を取り上げている。例えば「北のひとつ星」は、湯田町（現西和賀町）の山崎和賀流を論じる。1973 年に、34 歳で第 19 回角川俳句賞を受賞し将来を期待されていたが、その翌年亡くなった。和賀流の句作ノートを頼りに、詳細に作風を分析する。山口青邨を論じた「風土の幻影」は、宮野小提灯、田村了咲といった、青邨と同じ盛岡市出身の俳人の作品も交えて、俳句の風土性に迫る試みを展開している。

「北の歌人列伝」では、筆者にとって身近な人たちであるという柏崎驍二、小笠原和幸、田江岑子の 3 人の歌人を論ずる。いずれも、作品だけでなく、その周囲との交流も見つめ、人柄を物語るエピソードを積み上げながら、単なる評論を超えた俳人、歌人賛歌と言える。岩手の短詩型文学を語るうえで、貴重な資料となるだろう。

本書の最後を飾る白濱一羊氏.（「樹氷」主宰、盛岡市）との対談「俳句の未来」も、句作の秘密が垣間見えて興味深い。

本書のタイトルは滝沢村にある「鬼古里（おにこり）山」からとったという。「鬼越山」とも呼ばれ、宮沢賢治の作品にその名が登場する。ここにも著者の岩手と文学風土への愛着が感じられる。

著書は宇都宮市出身、盛岡市在住。俳誌「古志」「草笛」と「北宴」同人で「鬼」誌友。句集「羽音」、評伝「無告のうた　歌人・大西民子の生涯」などの著書がある。（敬称略）

と紹介されています。